ISSN　0917－4508

NANZAN UNIVERSITY

南山大学図書館報

ΔΥΝΑΜΙΣ

～デュナミス～

No.67　2015.4.1

CONTENTS

1 本選びにおける書評利用のすすめ
短期大学部教授：山田 泰広
2 スペイン文学の醍醐味を世間にアピールするために
外国語学部教授：佐竹 謙一
4 図書館イベント紹介
秋の企画展『語り絵の伝統－日本のマンガ・アニメ文化の源流を探る－』
展示会『中国で描かれたキリスト教布教図』
8 南山大学図書館ラビリンス
図書館事務課長：関谷 治代
10 図書館研修を体験して
図書館研修生：山本 知加子、朝比奈 磨実
12 新入生のためのライブラリー案内のお知らせ
南山大学図書館　新入生歓迎企画のお知らせ
編集後記

本選びにおける書評利用のすすめ

山田 泰広

日課や仕事の拘束から解かれた時間を読書に充てるのが私の楽しみの1つである。仕事柄書物に触れる機会は多いが、ほとんど授業の準備や研究のために読むのであって、それなりの楽しみがあるものの、どこかに「読まなければならない」という義務感がつきまとっている。これに対して、義務や必要からでなく好きな本を読める時間は、たとえ短くとも、本の世界に浸ることのできる幸福な時間である。古来、晴耕雨読は文人の理想とする生活であるが、私も退職後には好きな本を好きなだけ読めるだろうと期待してきた。しかし、その時期が近づくにつれ、そのような期待は肉体的現実の前に薄れ始めている。実際、この先、脳の機能が低下の一途をたどり、視力も低下して、読んでいるうちに居眠りしてしまうのが現実ではないだろうか。そんなわけで、自由な時間に恵まれ脳の働きもピークを迎えている学生時代こそ、好きな本を好きなだけ読むのに人生で最も適した時期であったと今になって思う。

しかし、学生の頃は面白い本、自分の知的好奇心を満足させてくれる刺激的な本を図書館や書店で見つけようとしても、自分が勉強している分野と密接な結びつきがあるようには思えない分野の場合、選択にとまどうのではないだろうか。なにしろ、大学図書館や大型書店の棚にはそれを前にして立ち尽くすほどの数の書籍が並んでいるのである。どのようにして、面白い本を見つけたらいいのか。

私の経験から、そんな場合には、書評の利用を勧めたい。それも、本好きで、その感受性を信頼でき、的確に自分の考えを文章にできる人の書評をガイドにするのがいい。私が愛読した書評集をいくつか挙げると、開高健・谷沢永一・向井敏著『書斎のポ・ト・フ』、丸谷才一・木村尚三郎・山崎正和著『固い本やわらかい本』、『三人で本を読む』、丸谷才一編『本読みの達人が選んだ「この3冊」』、鹿島茂著『解説屋稼業』、鹿島茂・松原隆一郎・福田和也著『読んだ、飲んだ、論じた――鼎談書評二十三夜』、米原万里著『打ちのめされるようなすごい本』、山村修著『水曜日は狐の書評』、『〈狐〉が選んだ入門書』、関川夏央著『「解説」する文学』、豊崎由美・岡野宏文著『百年の誤読』、といったところ。なかでも複数の読み手が対談・鼎談の形式で合評したものは読みの競演といった趣があり、参考になった。

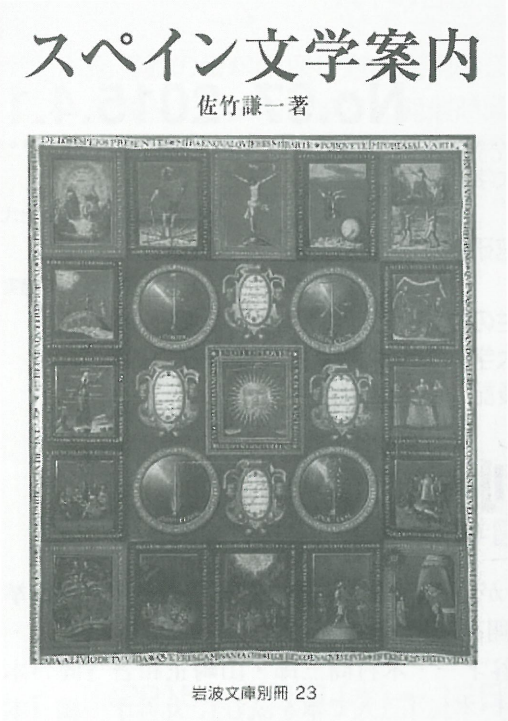
また、2012年まで21年間続いたNHK BSの番組「週刊ブックレビュー」も本選びに大いに役立った。番組では約2万冊の本が紹介されたが、番組の前半で本好きのゲスト3人がそれぞれ勧める本について紹介をし、司会者を含めてみんなで合評するのがとくに面白かった。

私の場合、以上のような書物や番組で紹介された本のうち、とくに面白そうだと思ったものは読むことにした。自分の専門ではない分野の本、それまで余り興味のなかった分野の本であっても、書評でその魅力を伝えてもらえば、自分でもその面白さを味わいたいと私は思う。人生は短く、自由な読書に割ける時間には限りがある。信頼できる読書案内人のガイドは本選びの手間を軽減するのに大いに役立つと思う。

（YAMADA, Yasuhiro：短期大学部教授）

スペイン文学の醍醐味を世間にアピールするために

佐竹 謙一



佐竹 謙一著
「スペイン文学案内」
岩波書店、2013年
請求番号：081K/246-A/v.23

長年、南山大学にてスペイン文学の講義をしてきて思うことは、日本の教育界全体にうねり始めた国際化という波に本学も乗り、カリキュラムが国際人にふさわしい人材育成を主体に組まれ始めてから、以前にくらべて学生たちの外国語の読解力が落ちていったことです。これは精読させてみると一目瞭然です。語学の基礎である文法や、架空の世界でありながらも人間の営みや心情が色濃く描かれる文学を原書で読む機会が減ったことが、主な要因の一つかも知れません。

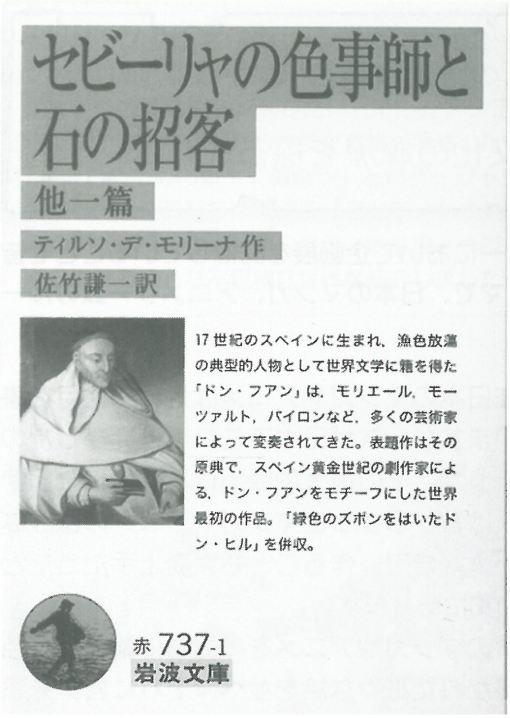
外国語をマスターするということは、コミュニケーションの能力を高めるという訓練のほかにも、その人の教養とかかわってくることから、各専門分野の先達諸氏によって研究され書かれた書籍等を通して、他国の言葉や文化をしっかりと学ぶ必要があります。そのためには邦訳を通してのみならず、外国語による情報およびその言語構造を把握する必要があるでしょう。そしてその基礎となるのが、日本人である以上、日本文化の基礎知識も含めた日本語の運用能力ではないでしょうか。この三つがうまくかみ合ってこそ、国際化の波に乗れるのではないかと思います。

スペイン文学に限って話をしますと、文学とは作家の文学作品だけだと思っている人が多いようですが、広義に解釈すれば、記録、新聞記事、報告書、遺言書、日記、手紙、メモ書きなど、幅広いジャンルをカバーするものです。大航海時代の記録や、何百年も前の生活事情を綴った記録や新聞記事なども研究の対象となります。従って文学史には、小説・詩・エッセイ・演劇のほかにも、歴史で扱われるような事項も含め、種々の文書が登場します。

これまでにわが国で刊行された「スペイン文学史」を繙(ひもと)いてみると、まともな単行本としては『スペイン文学史』（クセジュ文庫、白水社）と『スペイン文学史』（白水社）があるだけでした。それも前者は翻訳本であり、なおかつあまりにも雑然と作者名、作品名が並んでいる程度で、具体的な内容が見えてきません。後者のほうも同じく翻訳本で、著者こそ著名な学者ですが、なにぶんにもフランコの時代に書かれた高校の教科書であるため、内容的には古くて物足りない感は否めません。こうした事情に加えて、スペイン文学の知名度が英・米・独・仏・露などのヨーロッパ文学に比べて低すぎることから、一念発起してまとめたのが、2009年に上梓(じょうし)した『概説スペイン文学史』（研究社）です。題名に「概説」という言葉を付したのは、限られた紙幅ではスペイン文学史のすべてをカバーするのは不可能だったからです。そこで、さほど重要ではないと思われる作者と作品については割愛し、各時代の文学的傾向・特徴が顕著に現れている項目を選び、なるべくめりはりの利いた内容になるよう心がけました。

その後、2013年2月には『スペイン文学案内』を岩波文庫から刊行することができ、これによって、より手軽に手に入る文庫本として、広く文学愛好家に周知できるようになりました。ここでは前著と内容が重複しないよう文庫編集部の提案により「文学案内」と題し、内容を2部構成としました。1部で「スペイン文学の要点」を解説したあと、2部では代表的な作家の「作品論」として、かなりのページを割き、専門的な内容も盛り込みましたので、おそらく作品そのものを読まなくても充分に作品の特徴、作者の意図、文学的背景などが味わえるのではないでしょうか。

本書の前後には、同じく岩波文庫から、スペイン文学の代表作3冊の翻訳を出版することができ、スペ



ティルソ・デ・モリーナ作；佐竹 謙一訳
「セビーリャの色事師と石の招客：他一篇」
岩波書店、2014年
請求番号：081K/246-1/v.0-826

イン文学の重要性をアピールする意味では、画期的なことではなかったかと思います。

1冊目は、「死」についてあまり触れたがらない日本人とは対照的に、「生」と「死」はつながっており「死後の世界」こそが、魂が真に生きる本物の世界であることを訴えた、中世末期の死生観を代弁する『父の死に寄せる詩』で、この本にはもう一篇、「死」すなわち「死神」が年齢や貴賤を問わずあらゆる人々を「死の舞踏」に誘い、この世の無常観を浮き彫りにする、作者不詳の『死の舞踏』も収録されています。

2冊目は、これまで日本では「ドン・フアン」の背後に隠れて、ほとんど知られていなかった「第2のドン・フアン」といわれる、残忍非道で大胆不敵な「ドン・フアン」を主人公に仕立てた長篇物語詩『サラマンカの学生』です。一般的にわが国で「ドン・フアン」といえば、女たらしとかプレーボーイなどという軽いイメージでとらえられていますが、実は古くからスペイン文学の世界では「反面教師」としてカトリック教会のプロパガンダ的役割を果たす重要な存在でした。すなわち「悪の権化」です。これにより女性を誑かすという世俗的要素が、宗教的要素の陰に隠れてしまうのです。『サラマンカの学生』に話を戻すと、ここではプロパガンダ的要素は影をひそめていますが、ダンテの『神曲』の世界のように、作品全体の約半分が死後の世界で展開されるという一風変わった作品です。結末では主人公ドン・フェリックスの魂は救済されることなく、人間の罪深さが浮き彫りにされることになります。

3作目は、「ドン・フアン」の原型ともいわれるティルソ・デ・モリーナ作『セビーリャの色事師と石の招客』です。これはスペイン17世紀の漁色放蕩の典型的人物として世界文学に籍を得たドン・フアンを主人公として描いた作品で、モリエール、モーツァルト、バイロンなど、多くの芸術家によってかたちを変えて表現されてきました。また、ここに収録されているもう1篇は、『緑色のズボンをはいたドン・ヒル』という喜劇で、これはカルデロンの『淑女「ドゥエンデ」』と同じく、スペイン黄金世紀の喜劇の中でも筋が大いにもつれる作品です。この種の喜劇では、宗教的要素はほとんどなく、女性の男装、一人三役、男性の身勝手な愛、嘘や騙し、偽装、人違い、父権による強制結婚などのモティーフが、場の混乱を引き起こし、劇空間に彩りを添えています。ただ、日本ではほとんど知られておらず、こうした作品の醍醐味がいまだに伝わらないのが残念です。

このように、とりわけスペイン中世・黄金世紀の文学は、他のヨーロッパ文学に少なからず影響を及ぼしている点や、文学作品そのものが人間味に溢れている点などから、反面教師として学ぶべきところが大いにあります。授業では『ドン・キホーテ』を筆頭に、なるべく各時代の人々の考え方、喜怒哀楽の表現、死生観、名誉観、道徳観念などについて解説すると同時に、上記の訳本からさわりとなる箇所をコピーし、原文に照らし合わせながら読むことで、学生に少しでもこの文学空間を知ってもらえればと、アピールし続けています。確かに18世紀、19世紀のスペイン文学は他のヨーロッパ諸国の二番煎じと言われても仕方ありませんが、中世・黄金世紀の文学ともなれば、英、仏、伊、独、露のヨーロッパ文学に引けをとらないか、それ以上に迫力のある作品が目白押しです。その上、この時代の文学作品には、フィクションであっても社会の様相が浮き彫りにされているので、歴史書でも引用されることがしばしばあります。単なる歴史を読んだだけでは当時の人々の生き様や社会事情が分からないからです。おまけに写実的な語り口調と洗練された文体をも味わえるとなると、一石二鳥ではないでしょうか。この際、思い切って「さほど知られていないから、読む気は起こらない」という壁を破ってみるのも、おもしろいと思います。

(SATAKE, Kenichi：外国語学部教授)

図書館イベント紹介

秋の企画展

語り絵の伝統
ー日本のマンガ・アニメ文化の源流を探るー

毎年春（4月）と秋（11月）の年2回、ブラウジングコーナーにおいて企画展を開催していることを皆さんご存知ですか。2014年秋は「語り絵の伝統」というテーマで、日本のマンガ、アニメブームのルーツとも言える様々な「語り絵」の資料を展示、紹介しました。

現在日本のマンガやアニメは世界の注目を集めていますが、なぜ日本でこれほど発達したのでしょうか。その最大の要因は、現代に限らず日本人は昔からずっとマンガやアニメのようなものが大好きで、作ることも大変上手だったという事実にあります。

日本のマンガやアニメを「おもに輪郭線と色面で描かれた様々な絵を並べ、それに言葉を添えて時間とともにお話を語ったもの」と定義すると、日本にはそういうものが昔から沢山あったことに気づきます。中世の絵巻物は、躍動する人々の姿態や表情をマンガっぽい線で見事に捉えていますし、近世には草双紙という、大衆小説兼ストーリーマンガのような出版物が大量に出回っていました。

これらを「語り絵」と名づけると、マンガやアニメは現代の、絵巻物は中世の、草双紙を含む浮世絵版画は江戸時代の「語り絵」であると言えます。

以下に今回の企画展で展示した「語り絵」資料の一部を紹介します。

語り絵の系譜

平安 平安末	12世紀末	**絵巻物**　巻物形態の連続式絵画で話の筋を展開していく物語 『源氏物語絵巻』『**鳥獣人物戯画**』『信貴山縁起』 『伴大納言絵詞』
鎌倉	13世紀	物語絵巻　和歌絵巻 説話絵巻　戦記絵巻
室町	15世紀	**奈良絵本**　御伽草子のうち、美しい色彩の挿絵をはさんだ絵入り本
		写本や口承として伝えられてきた物語の版本化
江戸	17世紀	**草双紙**　絵入り小説　　**浮世絵、錦絵**
	18世紀	・「赤本」：童話『たからねずみ』 ・「黒本」「青本」：浄瑠璃、歌舞伎、軍記物、港談を翻案、簡略化 読者は成人まで ・「黄表紙」：大衆挿絵文学（洒落・滑稽・風刺） 山東京伝、曲亭馬琴 ・「合巻」：通俗性・伝奇趣味・道義性 式亭三馬、山東京伝
明治	19世紀	豆本、小本型・中本型絵本
		絵本が普及する 戦記絵本の流行
大正	1912	乗り物絵本の流行
		童画の誕生
	1922	・「**コドモノクニ**」：子供のために描かれる童画という絵画ジャンルの確立に寄与した、大正時代を代表する絵雑誌
	1923	**漫画風の絵物語が新聞等に掲載される** ・「正チャンのぼうけん」：震災後の子どものたちの心を癒すため タブロイドの「アサヒグラフ」から、「朝日新聞」に移される **日本初の短編アニメーション 制作**
昭和	20世紀	・「キンダーブック」：日本初の保育絵本（1927）
平成	21世紀	**世界中で『ポケットモンスター』が大ヒット（1999）**

ページ右下

次ページ上へ

平安時代後期～鎌倉時代

『鳥獣人物戯画』（721K/215/v.6）

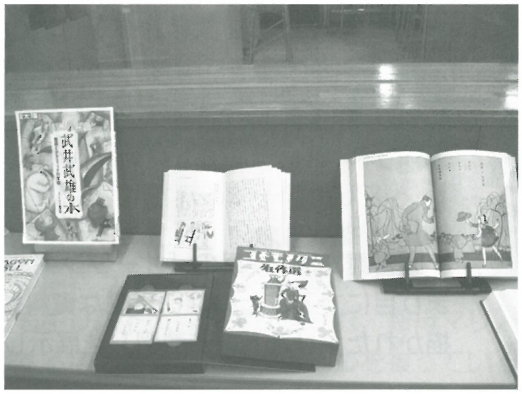
本物は平安時代後期に成立したとされる甲巻・乙巻、鎌倉時代の丙巻・丁巻の全四巻からなる絵巻物。

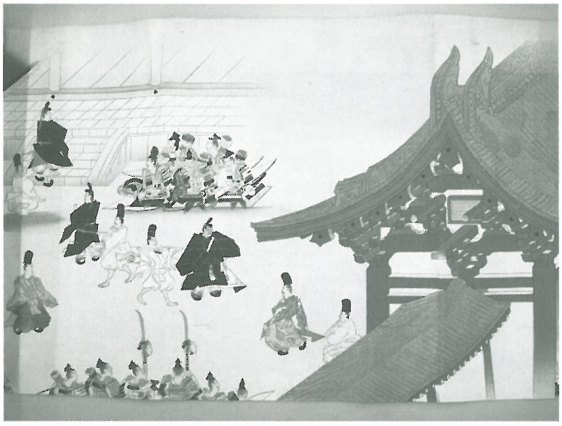
墨線のみで描かれ、現代のマンガに共通する遊び心にあふれた表現が満載の作品です。

明治以降

『コドモノクニ名作選』（051K/234/v.2～v.5）

義務教育の普及や幼児教育への関心が高まり、読み物や絵本、絵雑誌の需要が伸びた時代でした。大正11年「コドモノクニ」が創刊され、武井武雄が登場したことにより「子どものための絵＝＜童画＞」というージャンルが確立しました。企画展では復刻版「コドモノクニ」を展示し、そのアールヌーヴォー調の幾何学的な線と大胆な構図、ワクワクするような不思議な世界を紹介しました。





『平治物語絵巻 信西巻』　復製（貴重書室）

『本朝角力物語』(918W/1/v.0-20)（貴重書室）

企画展の目玉

企画展で皆さんに特に見ていただきたいものが貴重書です。貴重書とは、南山大学図書館が所蔵する資料のうち、学術的および文化的に価値が高く、かつ、保管に努めて長く後世に継承する必要があると認められる資料のことです。普段は地下2F の貴重書室に別置されていて、なかなか見ることはできません。企画展では、テーマに関連する貴重書をガラスケースに入れて展示しており、普段目にする機会の少ない資料を間近で見ていただくことができます。

制作された当時の紙の質感や色、作成者の筆遣いもよくわかり、時には昔の持ち主の書き込みやサインが入っていることもあります。

今回紹介した貴重書の中には、当時その資料を持っていた人が描いた（と思われる）「落書き」が残っていました（写真下、中央の○で囲んだ部分）。昔の人も私たちと同じようなことをしていたのですね。

貴重書を展示することは、単に古くて貴重な資料をお見せしたいからではありません。その資料が発表された当時、それを手にして見入っていた人々、また作り手の存在に思いを馳せ、その息遣いに触れていただければと思うからです。

企画展では、図書館員が「皆さんに是非見て欲しい！」と思うテーマで展示していますが、「へ～、面白い！」と思ってもらえる企画は何だろう？といつも頭をひねっています。

「これについて知りたい」「こんなテーマをとりあげて欲しい」などのリクエストも募集していますので、企画展のアンケートで皆さんのリクエストをぜひお聞かせください！

参考文献

「十二世紀のアニメーション －国宝的絵巻物に見る映画的・アニメ的なるもの－」高畑 勲著
徳間書店、1999年（請求番号：721K/285）

(SUGANO, Naomi：広報委員)

展示会　中国で描かれたキリスト教布教図

図書館では、7月の「オープンキャンパス」、9月の「父母の集い」に合わせて、普段あまり目にすることのない貴重な資料も交えた展示会を行います。2014年度には「中国で描かれたキリスト教布教図」を展示しました。

幾多の時代を超え、聖書はさまざまな言葉に訳され読み継がれてきました。聖書にまつわる物語もまた、多くのすぐれた芸術家によって描き残されています。それらキリスト教絵画は、神を讃えるだけでなく、キリストや聖人にまつわる出来事や事件をものがたり、神の教えや知恵を解き明かす絵画です。いわば、“見る”と同時に“読む”絵画です。識字率の低かった中世において、教会に飾られた絵画や彫刻は聖書の世界を生き生きと表現した、目で見る聖書でした。

あまたの宣教師たちが布教活動を行った世界の国々においても、キリスト教布教のために多くの絵画・版画が描かれ、また印刷されて布教に用いられました。そしてその描かれ方は、時代や地域によって様々です。

展示会の様子

展示会では、本学が所蔵する８ヵ国800枚を超えるキリスト教布教図の中でも大変珍しい中国の布教図を紹介し、好評を博しました。ここにその一部を紹介いたします。

1997年5月総数35枚の図版の寄贈がありました。それは、絹に描かれた原画をポスターサイズ（タテ77cm ×ヨコ53cm）に複製印刷したもので、そこにはキリスト教の信仰と聖書の著名な場面が中国の風俗を巧みに取り入れた形で描かれています。絵の下部には場面を表す言葉とその注解、そして聖書の出典が中国語で記されており、作者は王粛達、印刷は輔仁大学（北京）であるということが判明しました。寄贈者によればこの図版は1940年代に中国での布教活動に携わっておられたヴァン・アッセ神父（淳心会）が中国から持ち帰られたものとのことでした。

着衣、風景、室内の調度品などいずれも中国風の様式を取り入れた中国独自の画風による聖画像は中国人のためのキリスト教布教用資料として制作されたものと言えそうです。

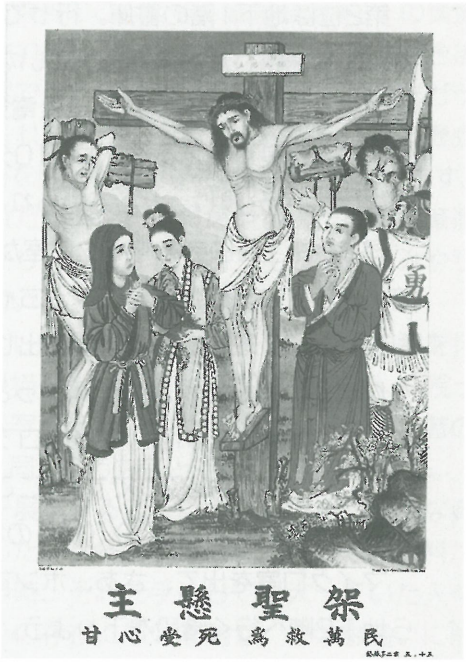
耶蘇聖誕（キリストの降誕）

「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（ヨハネ3.16）という聖書の個所とともに描かれているのはキリストの降誕の場面です。

顔立ちや衣装、建物など全て東洋風に表現されていますが、まぐさ桶に寝かされる幼子のキリスト、跪くマリア、驚嘆するヨゼフ、ロバ、星など、降誕の場面で描かれるべきものはきちんと描かれています。生まれたばかりと言えどもキリストには光背が描かれ、聖母マリアは彼女を象徴する色である青色のヴェールを被っているなど、細かい点も見逃せません。

後ろに描かれた女性と子どもたちは羊飼いであるようです。聖書には、天使からお告げを聞いた羊飼いたちが、まぐさ桶に寝かされているキリストを探しあて、神をあがめ、賛美する様子が書かれています。

主懸聖架（十字架につけられる）



新約聖書の４福音書全てにおいて語られているキリストの磔の場面です。キリストの十字架には「猶太君主」（ユダヤ人の王）との罪状書きがあります。西洋美術ではラテン語の略語で「I.N.R.I.」と表されます。またキリストの頭には兵士たちが嘲笑して被せた茨の冠が描かれています。

十字架の上のキリストを見守るのは、左から、聖母マリア（青いヴェールを被っている）、マグダラのマリア（香油壺を手にしている）、使徒ヨハネ（髭のない若者）であると思われます。

兵士は、東洋風に、槍ではなく青龍刀のような大刀を手にしています。

図書館には他にもたくさんの貴重な資料が保存されています。これらの資料は通常では目にすることができませんので、ぜひ企画展や展示会に足を運んで、実物をご覧ください。

参考文献

「南山大学図書館紀要　第6号」　南山大学図書館、1999年（請求番号：Z/010/N48）

「鑑賞のためのキリスト教美術事典」
早坂 優子著　視覚デザイン研究所、2011年（請求番号：702K/1698）

「キリスト教美術シンボル事典」
ジェニファー・スピーク著　大修館書店、1997年（請求番号：R/196/683）

（SAITO, Chiaki：広報委員）

南山大学図書館ラビリンス

関谷 治代

南山大学図書館は、古ーーい建物なんだなあ。（しみじみ…）1964年に建てたから、もう半世紀以上前なんだ。1980年代に本が一杯になりそうになったので書庫を増築したり、2000年代に耐震補強したりしている。だから、今どきの新しい図書館にはない不思議な場所がいくつかある。で、何となくうすぐらあい。私は、新しいものも好きだけど同じくらい古いものも好き、明るいトコも好きだけど、狭くて薄暗いトコも何となく落ち着いていい。人間って胎児の記憶から抜け出せないのか、狭くて薄暗いトコが居心地いいと感じちゃうのね。

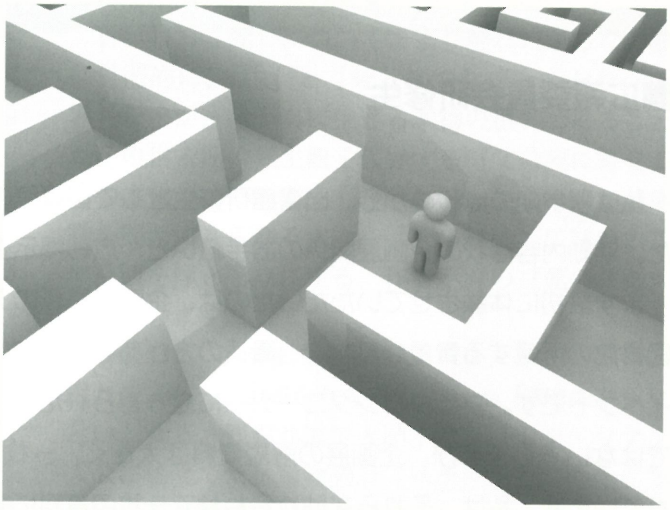
さて、薄暗さランキング第1位は階段。建物の中央階段で壁はめっちゃ古いタイルが貼られている。このタイルを見ていると何となくノスタルジー…急に立ち止まって後ろの人がぶつからないよう気を付けて見てみてね。この階段がラビリンスを貫通している一番大きな抜け道、つまり避難路だよ。地震が起きても落ち着いてゆっくり下りてくらはい。

第2位は地下1階の書庫。行ってみると、棚のてっぺんまでぎっしりと本が詰まっている、間の通路しか電気が付いていない…ということで普段は暗いんだけど、棚の間に入ると人感センサーでパカパカっと電気が点く。LED なんだよ。あっかるーーい！これで本の背文字が良く見える。でも、10分位じっと動かないでいると電気が消えちゃう。さあ、あなたは10分間じっとしていられるかな。

同じ地下1階にあるマイクロ室がどこか探してください。入口をのぞくとほとんど真っ暗。入っていいのか不安になっちゃう。中に変な妖怪がいるんじゃないだろうか…いるかもしれない、取りあえず勇気を出して入ってみよう。実は部屋の入り口の壁にスイッチがあります。押してね。パチパチっと、電気がつくと、ジャーン、DVD やマイクロフィルムなんかが並んでいる。マイクロフィルムは紙に次ぐ耐久性のある記録媒体なんだって。（ちょっと知ったかぶりです。）ここは何となく心が静かになる感じがする、実はここ、その昔、御御堂〈おみどう〉（祈りの場所）だったんです。なるほど、そうか…

マイクロ室を出て、さあ、ホンマモンのラビリンスへ行ってみよー。地下1階の書庫から地下2階へ行く階段を下りよう。ここは珍しく常時明るい階段なんです。降りた先は、地下2階の書庫、目の前に電動書架なるものがある。ボタンを押すと長ーい書棚がグィーンと動き出して、グィンと止まる。中に入って好きな本を取り出そう。ボタンを押す時、中に人が入っていないか確認してね、挟んじゃうといけないから。

次は迷路のドンツキ。電動書架を背にして反対の方向へ行くと、これまた薄暗い入口がぽっかり空いている。手前のスイッチを押して電気を付けて入っていくと左右に棚があるけど、圧巻は頭上のダクト（通風管）、なんか別世界。いけない所に来たみたい…来ていいんです。もっと先へ進むと、奥の奥に更に大きな棚があって、何と新聞を本みたいにしたのがデーンと並んでいる、落ちてきたら怖いな…



迷路の果てまで来たら戻ろうね。今来た道を逆に行けばＯＫなんだけど、迷わず出れるかなあ。

薄暗いランキングだったので、地下へ地下へ行ってしまったけど、今度は登り。人間上昇しなきゃあね。あの古いタイルの中央階段をどんどん登っていくと3階の踊り場に出る。どこに入っていいかわからない部屋の入り口が3つ。向かって、右の一番大きな部屋が講習会室。多分、図書館利用講習会の授業で使うことになるよ。

真正面がグループ学習室。歴史で勉強した「勾玉」の形をしたテーブルがある。自由に組み合わせて、友達とハードなディスカッションをしよう。大学生になったんだから、プレゼン、ディスカッションは誰よりもうまくなって一流を目指さなきゃ。壁良く見て、穴開いてるでしょ、吸音材です。だからといって叫ばないように。パーティションでうまく囲ったりして、他のグループに迷惑にならない程度に話してね。囲うと秘密の空間…うふふ…なんだけど、悪いコトはしないように！（厳しく！厳しく！）

もうひとつ左の小部屋、もっとコアなプレゼンとディスカッションができる。電子黒板なんかあったりして。フル活用、フル活用！　施設使用料払ってるんだもんね。

ラビリンス、最後の秘密のスポットは、カトリック文庫室です。ウチの大学はカトリックなので、こういうスペシャルな文庫があるんだな。地下1階にあるんだけど、自由に見られないよ。ここには特にふっるーーい本ばかり。明治時代の本が多いので、みんなが勝手に使うと壊れちゃうから、鍵をかけた部屋に大事に置いてある。たまに秋の展示会なんかで、展示するから見てやってください。すっごーーーいっていうような本もあるからね。

迷路のような図書館は隠れる場所が多くて楽しい。隠れながら、先人の考えに思いをはせてください。頭の中がかっつまってきたら、1階の明るい所に出てきて、PCでデータベースや電子ジャーナルを検索してみよう。

新しいものと古いもの、明と暗、動と静、表と裏、ハイブリッドです。南山大学図書館ラビリンスで迷って迷って迷ってください。迷えるのは今のうち。迷路から出られなくならないよう、学生のテセウスに、ライブラリアンのアリアドネが糸を渡します。何？テセウスとアリアドネがわからない？　これからグローバルな人になろうって人が、ジョークにも使われるギリシャ神話を知らないようでは困りますなあ。幅広い教養を身につけようね。じゃ、図書館に来て、自分で調べてみよう！

（SEKIYA, Haruyo：図書館事務課長）

図書館研修を体験して

■広報委員会研修生

山本 知加子

私は秋学期のはじめから、図書館研修生として図書館のお仕事を体験させていただきました。活動内容は秋の企画展関係のお手伝いと、広報掲示板の掲示物作成です。

まず最初に体験させていただいたのは、企画展関係のお手伝いです。企画展は、南山大学図書館の所蔵する貴重な資料を、職員の方があるテーマのもとに選びとり、展示するというイベントです。ブラウジングコーナーに立ち寄られた際、ご覧になった方もいらっしゃるのではないでしょうか。企画展の解説資料は大きく、一枚がA3用紙2枚分に分割して印刷されています。私は、それらを貼り合わせて一枚の資料にするお手伝いをしました。この時、文字が途切れてしまっているところはボールペンで書き足すなどして、綺麗に読めるように体裁も整えていきます。失敗しないようにするのが精いっぱいで手早くは出来ませんでしたが、何枚か貼り合わせるうちにコツをつかむことが出来ました。

次の活動は、広報掲示板の掲示物作成です。広報掲示板というのは入り口横にある大きな掲示板のことです。掲示板の作製にあたり、まずどのような本を紹介するかというテーマを決めます。はじめに過去の掲示物見せていただきましたが、テーマには季節に合ったものや時事問題などが選ばれていました。そこで私は「クリスマス」をテーマとして、関連する本を選ぶことにしました。続いて、カバーの選定です。図書館に保存されているカバーの中から、自分のテーマに合ったものを選びます。この時「文字だけのものより表紙の絵などが美しいものを選ぶとよい」というようなポイントを教えていただきました。最後にレイアウトを決め、掲示します。自分の最初のレイアウトは映えませんでしたが、職員の方がリボンの配置など、飾り付けについて多くのアドバイスをしてくださり何とか形にすることが出来ました。見え方に応じて飾り付けを変更できるよう、お菓子のラッピングなどのデザインや、折り紙・切り絵の本をよく見ておけばよかったと思います。

全体の活動を通して、私の手際は決して良かったとは言えません。しかし、授業を聞いているだけでは分からないことを体験できてよかったと思います。

（YAMAMOTO, Chikako：図書館研修生）

■図書選定会議研修生

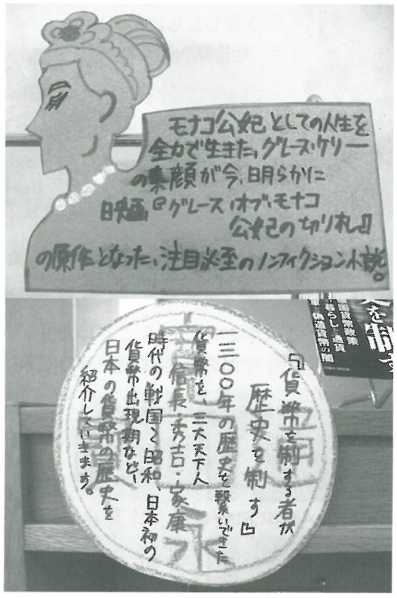
朝比奈 磨実

私は今回の研修において、本の中から十数冊程度ピックアップしていき、実際に現物を見て購入するか否かを決める見計らいという作業と、図書館研修で初の試みである選定した学生用資料の展示とそのPOP作成を担当しました。

本の選定は、個人的に気になる資料を他の人にもおススメしたいから早く配架していく、すぐに本の内容を読破し入れるかどうかを判断する、というものではありません。見本として届いた本と睨めっこしながら、インターネットや大学図書館の情報を管理するネオシリウスというシステムを駆使して、既に所蔵しているか・酷似した資料は無いか・シリーズとして定期購読していないかなどを調べ、見計らいを行っていきます。その内、さまざまな項目をクリアした資料が初めて図書館資料として利用者の前に出ることが出来るのです。

この見計らいが、私にとって最も難しく感じた作業でした。例えば、著者がインターネットであまり詳しく紹介されている人ではなくどのような本なのか把握できない、また同じ著者で複数似たような資料を所蔵しており候補に入れた資料を購入しても良いのか、などと判断に困ることが多くあったからです。そして、本の内容を見る場合でも、全てをくまなく読破するのではなく、目次・前書き・序章、あるいは本に付属されている帯の解説や、裏表紙の粗筋などから内容を大まかに判断することが最初は中々慣れず、苦戦したから難しく感じたというのも理由の一つです。

一方、楽しい面もありました。本を紹介するPOP作成です。どういった言葉を書けばいいのか迷った時、表紙や帯にかかれた言葉を参考に、利用者が興味を惹かれそうなフレーズを中心に集め、画用紙・ペン・クレヨンを用いて作成していた時は、小学生の時の図画工作の時間のようでとても楽しかったのを覚えています。そうして完成したPOPと選定した資料を共に、新着本とブラウジングのコーナーへ配架しました。棚に置かれたところを見た時も達成感と安堵で気持ちがいっぱいだったのですが、研修が終わった後も嬉しいことが起きました。後日そのコーナーにふと目を向けると、選定した資料が貸出しされていて無くなっていました。それを見た時、自分が選定した本が誰かの手によって借りられていくことに対しての恥ずかしさとこそばゆい思いが混ざり、複雑な気持ちになりましたが、反面、嬉しい気持ちもいっぱいになりました。



研修を通じて司書という仕事を体験し、普段は出来ない、図書館で働く人々の話を聞くことや、自身の学んだことが実際に使われているのを目の当たりにして、資格が欲しいからなんとなく授業を受けていた、という以前の消極的な意識が変化したように思いました。助言をして頂いた司書の方々は、どの人も丁寧で親切に教えてくださり、とても有難かったです。最後になりますが、これを読んで図書館研修に対して興味を持った方は、是非挑戦してみてください。きっと良い経験になることは間違いなしです。

(ASAHINA, Mami：図書館研修生)

名古屋キャンパス　新入生のためのライブラリー案内

名古屋図書館では、新入生のためのライブラリーツアーを以下の日程で行います。

図書館の資料の探し方や利用のコツなどをわかりやすく説明しながら、図書館をご案内します。開催時間中ならいつでも大丈夫！
1階ブラウジングコーナー前にお集まりください。お待ちしています！

	名古屋図書館
4月2日（木）	13:00 ～ 16:00 自由参加・所要時間約20分 随時受付

南山大学図書館　新入生歓迎企画

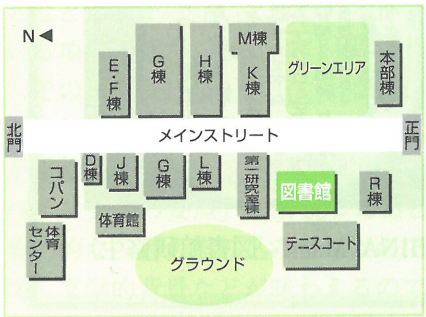
「ようこそ 南山大学図書館へ」

■2015年4月1日（水）～ 12日（日）
名古屋図書館1F（ブラウジングコーナー）

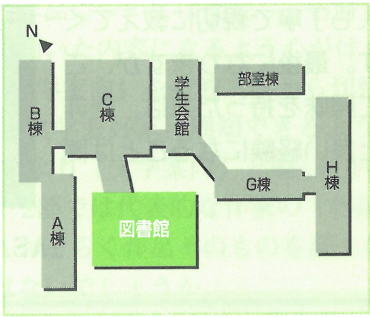
■2015年4月1日（水）～ 12日（日）
瀬戸図書館（ブラウジングコーナー横）

同時開催《名古屋図書館》
本で旅する
～愛知・岐阜・三重～

《編集後記》
新入生の皆さま、ご入学おめでとうございます。
資料も建物も人も様々で面白い図書館をぜひご利用ください！図書館員一同、心よりお待ちしています。（石）



<名古屋図書館>



<瀬戸図書館>

南山大学図書館報　デュナミス　No.67
2015. 4. 1 発行
http://office.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/
発　　行：南山大学図書館　広報委員会
編集委員：石田（信）、西尾、齋藤
印　　刷：一誠社
〒466-8673　名古屋市昭和区山里町18
Phone:052（832）3707/Fax:052（833）6986
※図書館Webページでもご覧いただけます。